『労務者渡世』賞七六年度当選作（小説）

ケッチン

――釜ケ崎語録――

丹田一竿士

(一) おれは「かみやん」

釜ケ崎用語のケッチンというのは、カスを食うことだ。いただき、とも、竹のバッチともいう。昔、中国では刑罰用に、竹のバッチをはかせたものらしい。

釜ケ崎にこんな歌がある。

「鬼の佐野安、蛇の名村、情け知らずの藤永田」

木津川沿に立並んだこの三つの造船所は、それぞれ一代でたたきあげた会社だけに、設備の不完全や労働強化で、一度の進水ごとに三人五人と人柱が立った。

安いゼゼコで、ボイまくられて、朽木のようにバテていく。釜の渡世人が、それもおずおずしながら、恨みつらみを残したのがこの歌であろうか。

その情け知らずの藤永田造船所の下請業、大洋船舶KKがおれの組元である。

で、おれ神山力三、おん年三十九歳、和歌山県田辺、竜神村出身。現住所は西成区四条通二の二、宝栄館のアンパク（安泊）住い。

十年もの焦げつき（定着）で、このドヤではもうヤサボス（古参の顔役）。大師（バクチ）とオドリ（けんか）でマエ（前科）が二つある。自慢にならんが、現場ではおれをケッチンのかみやんと呼びよる。勿論、食わす方やのうていただく方や。おれの一日は、明けてケッチン、暮れてケッチン、正にケッチンの明け暮れである。

組へはもう十年以上の勤続、まだ本雇いやない。いいや、そいつはおれの方から御免をこうむった。考えてみて、エエか。履歴書に抄本つけて出せ、一日休んでも請暇願がいる。三日も休むんなら理由書か医師の診断書を添え、手間（賃金）は毎月二十五日の一回払いで中間では一切貸金なし。おのれが稼いで預けてる金が何の因果で借りられん。何がおかしゅうて本雇いや。息がつまって、べもこけん。そんなことなら天外無縫の釜ケ崎渡世、こいつの方がおれの身についてる。

さめて五ン合、寝て半畳、気楽な渡世ときたもんや。もっとも日雇いいうてもおれ様は十年選手や。時間給で千五百円。実働七時間の定時で一万五百円也。おれは年季の入ったトビや。スズメやカラスとはわけがちがう。これくらいの日当ならアタリキ、シャリキや。手間は日払いの現ナマや。そやからおれのポッポには、オンテ（五万円）ぐらいの金はいつでもネンネしとる。

一日来てはケツワリ、二日来ては三日休む、出入りのはげしい造船現場に十年以上のカマポコ（板付き）なら、よっぽどのイカレポンチかポッペンでない限り、エエ顔にはなれるはずや。おれはちょっとアッチモン（八文）やがハッタリはきく。現場では組のレッキとしたボースンやと思うとる。組の方でも役付きの手当も出さずに、都合の悪い時にはあれはアンコでと逃げられるし、オダテだけきかしといたら嬉しがって働きよるので、エエ時だけの黙認ボースンや。免状なしのもぐりボースンか。

おれもそんな気取りで、くにのバシタ（女房）にもいうてる。ワレの御亭主さんが吹く笛一つで、何十人の人間が手足のように動きよる。くにの裏山より大きい船でも、おれの笛で、右へも左へも廻るんじゃい、と。バシタ、相好くずして泣いとった。

机竜之介で名高い山奥の竜神村を、おん出て十年以上。手元がらくになってからは、年に一、二度は、ちょっとした紳士になって必らず帰ってる。おれも育ちすぎの御年配や。キス（酒）もやらん、タレ（男事）もかかん、大師もぶたんでは嘘になる。

世にいう三道楽もほどほどには楽しんで、あとはじっと我慢のかみやんである。

おかげでためた貯金が三百五十万、今年はじめて西成郵便局長はんが、年賀状くれた。これでかみやんも釜ケ崎迷士の一人や。ホイホイ。

もう二年頑張って、オンテ百杯の五百万がいまの目標や。頑張るで、あと二年。これがたまったらくにへ帰る。くにへ。ガキはないけど、三つ年上のオイニョのお崎が

待ってくれとーる。裏美人やが働き者で、ど根性者や。こっちゃすまんがよろしく使いでるのに、お崎の方はどないやろ、親類縁者の多い田舎や、浮気一つもできへん。おれが帰ったら、ためた金で、あともう二、三枚の田地を買うて、家も建てなおして、この十年をナメくさった近所の奴らを、見返してやると、エライ馬力や。それにコッチリ抱いたるで。離ればなれの十年分をな、ウフヲフ。

しかしや、そのもう二年が頭が痛い。ケッチン暮しのこの毎日やと、思うただけでもいやになる。気楽な釜の渡世にも、たまにはイヤもあるもんや。そいつをぐっと使ぐのも、釜のしがない渡世の一つか。ものも取りよう考えよう、そのケッチンをめしのお菜と考えてみてみよ。笹鶴の米のめしでも、お菜がないと旨うない。ケッチン食わんとおまんまにならん。チャブ（めし）がかかったケッチンなら、いやおうなしに食わずばなるまい。そうとサラリとあきらめよう。それにケッチンにも、たまには胸がすかっとするケッチンもある。エエと悪いを取りまぜてもう一と息のしんぼうや、ソレソレ。

四　チンパン専務とスマンの松ちゃん

おれの現場の一日は、朝礼から始まる。

雨の日以外、本社の事務所前で全員集合、全員といっても日雇いは別である。平工員はうしろへうしろへと廻りたがるのに、役付工はどいつもこいつも、最前列の工場長の目につくところへ目白押し。メモをとる格好をしたり、不動の姿勢だったりで、オノレの売りこみに夢中や。大の男がメダカの学校やあるまいし、長生きせエ。

おかげで朝の手割や作業の指示はやりっ放し、こっちゃ一人で大車輪や。新米の現場への引渡し、作業の心得や用具の借出しと、ごますりどもが現場へ出よるまでに、下準備だけは完了しとかにゃウルサイ、ウルサイ。

毎度のことだけに、それぞれおさめて、寄場へ戻ってくる。クタクタや。やれやれ一服と椅子に腰が、おりるかおりんうちに、

「かみ！」

そうらきた。名刺の肩書通り、組の、何もセンム取締役、社長の身内や。チンパンの神田。人さまの名前を無断で千切りくさって、カンのたつ奴や。一メートル五〇そこそこのドチビのくせに、肩を振ってガニマタで歩きよるのでチンパンそっくり。おまけに大和御所、落柿村の産、柿本人麻呂はんの血統やて。

「かみ！　われはドアホとちがうか」

へエそうだす、と誰がいえる。

「何べんいうたら、シントクさらすんじゃ」

「なにをだんねん？　チーフ」

このチンパン、英語にほんに弱い。チーフチーフいうてたらゴキゲン。ぬかすケッチンは毎度の通り、どうせオノレの担当の出ヅラのことやろう。

「今朝もメンチャク（面着＝出勤確認）なしが三人もけつかった。釜やろ。われの手下や。何ぼ現場へ通ってても、メンチャク入れなんだら出面にならん。よう、ならん出面は誰が払う。何べんいうたらわかるんじゃ、ドアホ！　それとも今日の出面はわれが見たるんか、ワレの手銭で仕切るんかい」

なんでおれが他人さんの賃金仕切らんならん。こっちゃまだ自分がイタダキ足らんぐらいじゃ。それでしゃあない。相手が悪い。

「ド新米やで知らなんでんな、よういうときますチーフ。今日のとこはチーフの顔で現場の証明たのんまっさ。これはチーフやないとあきまへん。チーフ、たのんます。なあチーフ」

チーフ連発が効いた。

「今度だけやど、エエか、しゃあない奴や」

何がしゃあないじゃ、それ〳〵ういがオノレのがらじゃ。あほらしゅうて空冢のセンチや。声も出んわ。

工場総面積十五万ヘーベ（平方米）、三つの船台と五棟の工作工場と、ほかに鋳造、鍛造工場もある。三万五千トンまでの船を、年間十隻はおろす（進水させる）。二千五百人の工員の四割は下請工である。景気不景気で、時にはこの比率が逆になることもある。

その下請工の本社側指導員、もっともらしい職名やが、本社や現場で総スカンを食ろうて、下請作業へポイされたハネもんや。付いたあだ名がスマンの松ちゃん。こいつのハウスの前を通らんと下請作業工場はのぞけん。つまり安宅の関や。そうっと抜けたろう思うても富裕左ェ門ここにありで、目を皿にして見とる。

「アッ神山くーん、スマンがちょっと」

言葉はていねいやがアゴでしゃくってくさる。

「ヘーイ」

「今朝もノーカードの証明が三人、全部きみんとこやて、こらスマンが困る」

「ヘー」

「カードを一体、何やと思うてる。エエ。仕事さえしてたらエエ、それはちがう。スマンけど、正しい手続きをして働いてや。いまはコンピューター時代や。人間の管理は機械がする。スマンけどホンマやで」

「さいだす、さいだす」
「何の作業は何人工（なんにんく）で何時間かかった。これはカードが基礎や。スマンがそうやろ？」
「そうだす」
「基礎になるカードがなければ、労働力の掌握はできん、そやろ神山君、スマンけど」
　朝礼の、工場長訓示のうけ売りや。
「朝のカードは、きちんと必らず正しく入れる、スマンがほんまやで」
「スンマヘン、ほんまに。新入りやったもんで。ほんまにスンマヘン」
　こっちまでスマンの神やんになりそうや。
「というて、カードはあるのに本人が蒸発、これもスマンが困ったで」
「さよか」
　これからが昔の自慢ばなしになる。
「カードはあるのに人間はおらん。スマンけど組のアンコや。守衛や下請はトンズラ（無断退職）やいう。スマンが僕一人はそうは思わん。そこで必死で探した。人の生命や、スマンが、そうやろ」
「なあ、御苦労さんに」
「広い工場の隅から隅までや。スマンけど僕一人でやで。見つけたで――しまいに、どこにいてたと思う？」
　毎度のせりふで聞きあきた。船のタンクで死んでたんやろ。
「船底のバラスト・タンクに浮いてた」
「泳いどったんだすか？」
「ちがうちがう、これやがな。スマンけどほんまやで」
　両手で拝む格好をして見せよった。
「もう一つ別件があってなあ、スマンがこれも僕の発見や。トンズラにしたがったが僕が捜査に専従した」
「御苦労さんで」
「こっちは、グレン（起重機）のカーバーにもたれて、西向いて（死んで）いやはった」
「ラジオのニュースでも聞いてたんで？」
　知っていながら知らない素振り。何べん聞かされたか教えたろか。
　もっともらしゅうまた手を合せよった。
　この人、スマンの松ちゃん、おるやらおらんやらわからん幻の蛇、ツチノコ探しのメンバーである。そのせいかケッチンまでがのっぺらぼう。どこが頭で尾やらわからん。ツチノコを人間に見立てたら、こんな男になりよるかと、ホンマにスマンが思うたる。
「ナア、職長はん」

とにかく、おれは役付には一階級ずつ上で呼ぶことにしてる。下で呼ぶとキゲンが悪いが、上で呼ぶ分にはキゲンがエエ。
「出ましてんとなあ、ツチノコが」
「出た!!　どこでや！　いつや？」
「金剛山の水分神社の境内で。知りはれへんの？　二、三日前の新聞に大きゅう出てましたがな」
「ナニ新聞やった？　朝刊か、夕刊か」
　この話になるとオロロのチョンや。
「さあてと、何新聞やったか、一べん調べてきますわ」
「スマンなあ、ほんまに」
　今度は逆に深々と最敬礼をしよった。
　そんなもん、小豆のトーフじゃ、あってたまるか。春日遅々、夏日延々、黙って聞いてたら朝までもつづく。やれやれ、あとはどうなと、きゃあなろたいや。

㊂　三つめ四つめのケッチン

　ケッチン二つでもうヒル前か。朝が早いせいかちょっと疲れた。腹も北山や。曲げ物工場の水圧ポンプの音まで、ヒルハマダカ、ヒルハマダカときこえてくる。
「かみたに!!」
　空腹にずーんとこたえるハクイ（切れ味のいい）タンカや。三人五人のかみやんを東で呼んでもオツリのくる声である。近くの連中がニヤニヤ見とる。他人の食らうケッチンなら痛うもかゆうもないやろ。声の主は本社資材部長、山岳会のピピンチョ、会長。
　きたかチョウさん、待ってたホイ。
　この山男部長のケッチンは絶品や。
　真夏の夕立のあとみたいに、スカーッ、カラーッとしたケッチンや。おれはこのお声を聞かんと昼めしがまずい。部長もおれにケッチン食らわさんと、気分がのらんらしい。
「またやまたや、足場のてっぺんから板や丸太を放りくさって、バッシバッシ折ってくさる。何べんいうたらわかるんじゃい」
　グットとおれ、鎌首をもたげた。この人だけにはケッチンのオツリが払える。
「日本国中の造船所で、進水の前日に、それもヒルごろから、足場のバラシ（解体）にかかる馬鹿会社が、どこにおますかい」
「作業の工程はわしは知らん。造船課にいえ造船課に。エエか、わしのいうのは、板や丸太はロープで束ねてそっとおろせというとるんじゃ」

何をぬかすと言しゅうなってきた。
「アノネ、住友や鴻池のオジ〻ジ〻（お嬢さん）とままごと遊びをやってるんとちがいまっせ。落ちたらそれこそ人生一巻の終りの仕事を、時間ぎりぎりでやってますねン。残業夜業にかけられん仕事だっせ」
　歯ぎしりかんでも負けてやるかい。
「板一枚で一万五千円、エエか、丸太一本六千円や。それをドンパリ折りくさって、それでものぬかさしたら、単価がどうの、工賃が安いのやて。ちょっとは会社の身にもなれ、会社の」
「三万五千トンの足場バラシを、たった半日そこそこでや、それも人数かけんとやり仕舞かけて、仕事が荒いの、横着のやて、アホラシヤの鐘が鳴るわ」
　この山男部長のケッチンは、大股で歩き歩きの移動ケッチンや。ついてはいけん。そこでおれさんも考えた。つまり一歩あるいて二歩とまる。二歩あるいては三歩とまる。川中島の合戦で上杉謙信得意の軍略、三十六段、車がかりや。部長が気付いた時には、かみやん、はるかこなたにトンズラ（逃げ）の巻。
　うどんと、夜道と、ケッチンの長いのはほんに好かん。
　それにいま一つ、トンズラかまさんと昼めしにアブレる。
　部長らは、冷暖房の食堂で、弁当の方は逃げも隠れもせずにちゃんとお待ちかねや。ゆっくりシャリにありつけるが、おれらはそうはいかん。一応メンチャクの数だけの、弁当箱は並ぶ。これがしかし、ちょっと遅れると箱はあっても中味がない。つまり二つパクッテ知らん顔の奴がいる。どいつこいつというても、現場を押えん限りは仕方がない。中味の空の弁当箱の前に座った者が因果や。一食三百円を、二食分払うて一食分にありつく。それも予備があってのこと。ない時は外食の冷いまずいうどんで辛抱や。その弁当も、本雇や本工は二百五十円や。差別するなーというてたら、本雇と一緒にできるかいとチンパンにどなられた。ケッチンはなんぼ食ろうても体にこたえんが、弁当だけはふところにひびく。ホーシ六個はちょと痛い。
　アンコ寄場（日雇い休憩室）の風景は、月落ち花はうつろえど、十年一日、さして変り栄えはない。安物の椅子テーブルが並んで、天井四方はベニヤ板のぶっつけ工事。ちょっと見だけはキレイになった。早間にめしをかきこんで、賭けの碁、将棋、カミモチヤキ（花札）、三〇分ほどのつかの間なら、ちょっとはゆっくり過さんかい。始業のベルが鳴ると、守衛や役付に散らされて、クモの子みたいに現場へ行く。弁当箱、湯呑、茶びん、灰皿とテーブルの上は雑多だが、大風の跡みたいにひっそりかんや。腹はくちたし、午後からの現場は朝ほどに手もかからん。いまだけが、鬼のいぬ間の洗濯時間や。ヨレヨレの袋から喜八（たばこ）一服、千両の味や。
「フーム、うまいなあー」
　吐いたけむりが声になる。
「かみか！」
　しもうた、ベニヤの薄い仕切りの、向う側は社長室（下請の）だった。
「ヘイ」
「何をしておいでございますねン」
　いやなからみや。
「人をボイ出して、あとでぬくぬく一服か。そらあ通りまへんで。エエ、かみよ。ポソッと油売る暇があるんなら、バラシの現場でも見たらんかい。われもトビやろ、それともカラスになったんかい。それならそうというたれよ、手間（賃金）の方の都合もあるで。さようでございますやろ、かみやーん」
　下手な漫才の台本書きがこの社長の芸や。ケッチンまでが漫才口調や。
「何をたれてんねん！」
　と、ガチイと一発、このチビデブ社長にかましたったら、さぞやエエコンコロモチやと思うたが、あと二年の生活にかかわりが大きい。さわらぬ神にタタリなし。逃げの一手あるのみ。やーれやれ、気安う一服もできへんがな。

四　ひさごのお加代

　問題の、バラシの現場をウロチ〻ロする。
　表にあらわれ裏にかくれ、変幻自在に要領をかまして、もうかれこれ三時とみた。バラシも山を越した様子。あとは地上の片付けだけ。平穏無事。それでも死亡災害頻発の時間帯でもある。本工、本雇はおれは知らん、釜の渡世人だけは、怪我、災害のないように、守ってやらな、かみやんのコケンにかかわる。頑張るぜー、もう一息や。
　その代り、仕事がすんだら、久しぶりや今夜は何が何でも〈ひさご〉へ行くぜ。お加代のケツでもさすってこまそ。エンコ（公園）カン（野天）で一丁てなことに、へへへ……思うただけでゴクンと生ツバを呑みこんだ。
「オーイ、君」
　へえ、キミときた。おれかいなと振り向くと、工場長が立っていた。朝礼で見る顔や。
「ハイッ」

しゃあない、貫禄がちがう。さすが釜の稼業人のおれも頭が勝手に下りよる。ポケットから手一杯に何やらをつかんで出しよった。

川向うの船町修理工場へ外国船でも入ってケーキか、洋モクのおスソ分けにでもあずかるんかいなと、欲張って両手を出したら、その上へ、たばこの吸いがらを一杯のせた。

「エエか、たばこは指定の場所で吸う。イイネ、吸いがらは指定の空き罐に入れる。作業中のくわえたばこは厳禁。エエか」

たたきつけるようにいうと、あとも見ずにサッサと行きよった。短いケッチン、時雨ケッチンや。

「かみやん、工場長にナニいわれててん？」

どこで見てたんか、メマンの松ちゃんが心配顔で寄ってきよった。いいっ放しの聞きっ放し、おれが知るかい。

「何をーセコセぬかすんやい。工場長な盲判ついて、持ってくるオカカ（贈物）しゃぶったらそれでエエねん。現場ウロチョロして、かみやんにまでケッチン食わすことあるもんかい」

ひさごのお加代がまぶたに浮ぶ。姿美人（顔はよくない）でオシャブリ（乳）とオケツはポン一（日本一）や。ブリンブリンのオシャブリの谷間に一ぺん顔を沈めて寝てみたいわ。フフフッ。あともうちょっとの辛抱や。エーイ、もう一廻りしてこまそ。

モーや、今日の昼休みに釜の渡世人が、金を貸せといいよった。アカンと蹴ったら、これを買えと、アメジストのエンコ（指輪）を出しよった。住之江のボート場で、ダチ公に頼まれて三万円で買ったが、実際は五万円以上のブツ（品物）やといいよったが、こいつはついていけん。押し問答の末に二万になり一万になった。果ては大の男がキナミ（泣き声）になりよった。ボートの元手がよっぽど欲しいらしい。五千円とはたいたら先方もしぶしぶ手を打ちよった。

五千円なら安いもんや。

今晩、お加代の口説き料に使うたら、なお安い。やるわというて、指にさしたったら、どないなるやろう。うれしい！てな寸法になっておれのモノにならんかな。フフフ。夢は枯野をかけめぐる……。

終業のベルが鳴りよった。風呂に入って念入りにテンプラかけて（髪をととのえて）真一文字に、ひさごへレッゴー。おれもこのごろ背広が似合う。

(五) シビレた果てに

柴谷町の本社前からバスが出る。ジャンジャン横丁前まで三〇分の行程。そのジャン横をちょっと入る。国電の高架下をくぐって、すぐ右へ折れると一方の並びにひさごがある。ジャン横をたった十メートルほど離れただけで、周囲がぐっと落ちつく。客筋もハクイ（上等だ）。洗い場と燗番の、ちょっと十二金（足らん）おばはんと二人だけの男っけなし。ジャン横の商店主やら会社員らのなじみ客でけっこう繁昌してる。

当人のお加代やが、キスがまわって熟れよると（酔うと）、蓮法色気が出て、誰彼なしのベタモーションや。あれやったら、前がタルイ（たやすく許す）のとちがうかと、ちょっとかみやん、猿の小便や。

間夫か、且ツクでもあるかいなと気を張ってるが、目下のところ、情報不明。若干ながら希望はもてる。しかも日も浅いのにツケもきいた。

「おいでやーす。なんや、かみやんかいな」

客は一人も入っとらん。

「ちょっとかみやん、この前はツケで帰ってんで、ツケはきっちりしめてや。ウチは現金や。ツケはあかんで。今日も口あけからアオタ（一文なし）の客はゲンが悪いで、アオタやったらよそで呑んできて」

どんなケッチンでもかませ、かませ。いまに笑いのとまらんゴキゲンにしたるで！。

それでもカブト（コップ酒）で、おれの好みのアテがちゃんと並ぶ。口と心は裏腹や。ここらがお加代の心意気や。おれの好くのも無理やない。

おれのくちあけの皮切りはとかく縁起がエエ。三人五人とまたたく間に満席や。新顔が多いせいか、なじみの客はツンボ桟敷や。

やっとおれの前へお加代が座りよった。

黙ってエンコ（指輪）を出したら、片手で取りよった。格別見るでもなし、そのままエプロンのポケットへ入れてそ知らぬ顔、お隣りさんへボーイと座移りや。イカレポンチでざまもあれへん。次から次のお客へ大サービス。時々ちらりほらりと目だけは、通わせよる。

歌の文句やないけれど、ひとり酒場で呑む酒は、廻りが速い。それもカブトのぐい呑みならハカもゆく（量も多い）。

入れかわり立ちかわりの客足も、ちょっと途絶えて、宵山のたてこみがすんだか店もひっそり。一人残った客をアガリナマズ（金にならん）客と踏んでか、お加代はお愛想もみせず、仕切りを抜けておれの横へ座りよった。

首へ手をかけてサシミ（接吻）に出たら、アホウと、すかされた。

「かみやん、これ何やねん、ワテにくれるてか？」
はじめて問題にしてくれよった。それも嬉しいことにちゃんと指にはめとる。
「そうや、やるで、ワイのエンゲージリングや」
「アホクサ、エンゲージリングやて。かみやん、これホンマもんか、なんちゅう石や」
「アメジスト、舶来の石やで」
大日本は山梨県産物の紫水晶、どうでもェェが舶来にしとこ。
「ホンマに舶来？　どこぞでヨッコした（盗んだ）んとちがうか」
七分の疑念に三分の信用、分析したらそんな目つきや。
「アホいえ、三万円も出して、今日の昼、現場でダチに買わされてん。本物も本物、バリバリの本物や」
大師はぶってもヨッコはやらん。白無垢鉄火のかみやんやで。
「心配なら返してや」
「イヤーン」
と首を振って、はめた手を胸にかかえて抱きよった。色気がムーンと立ちこめる。気をもたせるように、ちょっと寄りかかってささやいた。
「かみやん、こんなもんで埋合せに、たまったツケ、踏むのん（倒すのは）イヤやでー。帰りでェェからしめてや」
取り歴の強い、ドフンバリや。
「わかったわかった、入れる入れる。それよかちょっと酔いざましにエンコ（公園）へ行こか」
「エンコのオカンで何する気や、店がおます。アホラシー」
こっちゃの心底、丸読まれや。ナマズの客が消えよった。かくなる上は、酔わして聞きたいことがある。アイマの差しで、グイ呑みや。お加代、熟れよる熟れよる。
「かみやん、たかがガラス玉一つで、ツケ踏むようなケチな根性は起しなや。そんなチョロ手に乗ってたらピタ（飛田）や釜でノレン張って商売はでけんで」
薄いエプロン越しにでっかいオシャブリがゆれとーる。どなたのキスでオダあげてんのや。おれのツケならサンタク（沢山）の散財やで。酔いが急に廻ってきた。電気に二重三重のカサがかかる。高いところから、体がスーッと沈んでいく。夢中で前のお加代にすがりついたら、かわされて、どすんとずっこけた。
「サカリのついた猫みたいにすぐにこれや。釜のドヤモンは、いやらしい」
ドエライ、ホゲタ（いい方）や。大きな尻がゆれてる。

ら、ーイ〃　ゴロ〃　ねまこいったら、今度にパチンと頬べたが鳴った。
「指輪一つで甘ったれな、そのわら釜の〃　ミさいっこんや」
キスグレ（酔いどれ）のケッチンにしても針がある。背筋が冷い。何かつかまえんと、体がだんだん沈んでいく。立ち上ろうと気張ったら、ウハー。スイバレ（小便）や。下腹へんがぬくうなった。ジンジロリン、ジンジロリン。果てしなくつづきよる。止らんがなー。ああ、エンビレ（泥酔）や。
誰かが遠くで呼んどる。
「ちょっとちょっと、かみやん起きてんか。もうカンバンや。早う起きていんでんか。かーみーやん。ちょっとヤとちがうで。いんだれよ。ウワァ、クサイクサイ、小便のなかで寝とるがな。あなた、ちょっときて。かめへんからドタマから水かぶせて。ホンマに手のかかるガキや。おいどさすりにきたり、公園へ行こやて、ドスケベめが。こらあ、かみ、早う起きて、いにさらせ。あんたあ、しゃあない、たたき出して。つまみ出して」
奥から、先刻のアガリナマズが出てきた。
おれの首すじをつかんで、ずるずるっと道路へ引きずり出した。
「アホメ!!」
お加代がうしろから、バーッと一掘りの塩をまくと、屋台をオキャーンとこぼした、寝そ差下者が、ピチンと鋭く鳴った。